

島崎杜香

「クロスロード」

登場人物

小林 寿葉 (25)
松下 りょう (18)

都内の会社員
都内の男子高校生

豊田 祥子 (45)
豊田 修平 (47)
豊田 眞子 (9)

田舎暮らしの女性
祥子の夫
祥子と修平の娘

坂野 悠希 (17)
坂野 良子 (42)

りょうの友達
悠希の母

先生

りょうと悠希の担任

○回想／寿葉の部屋・内（早朝）

ベットで目を覚ます小林寿葉（25）。

寿葉の声「別に、悪い人生じゃなかった」

× × ×

寿葉、満員電車に乗って会社に向かう。

寿葉の声「満員電車は好きではないけど、」

× × ×

寿葉、オフィスで仕事をしている。

寿葉の声「もう3年目。仕事には慣れたし、」

× × ×

同期とランチを食べている。

寿葉の声「職場の人間関係も悪くなかった」

× × ×

家に帰り、電気を点ける。

寿葉の声「それなりの毎日」

冷蔵庫から作り置きのご飯を取り出し、

リモコンでテレビを点ける。

× × ×

テレビで交通事故のニュース。

『男子高校生 交差点で乗用車と衝突

し死亡』のテロップと映像。

寿葉の声「絶望するような現実も」

× × ×

ぼーっと見ている寿葉。

寿葉の声「悲観するような過去もない」

× × ×

机の上うつ病の診断書。

寿葉の声「ただ、生きていなくてもよかった」

○駅のホーム（朝）

スーツ姿の寿葉、パンプスを履いてふらふらと歩いている。

駅のアナウンス「まもなく、4番線を電車が通過いたします」

後ろから電車が小さく見え始める。

おぼつかない足取りでホームの先頭へ向かっていく寿葉。

前に向かいながら、寿葉の体は少しずつ線路に近づいていく。

寿葉に見向きもせずスマホを触る人々。

電車が近づいてくる。

一瞬、寿葉の足が止まる。

が、再び線路に向かって進み始める。

ホームに迫る電車。

点字ブロックを踏み越えるパンプス。

男性の声「あの」

寿葉「！」

気が付くと、男性が寿葉の腕を掴んでいる。

二人の横を通過する電車。

寿葉、驚いて振り返る。

蛍光イエローのダウンジャケットを着た若い男性。

男性、寿葉の腕から手を離して。

男性「あ、えっと…」

男性、目をそらす。

男性「あの…これ、落としてます」

男性の手には切符。

声は半分電車にかき消されている。

寿葉「え」

男性「これ、落としたんでどうぞ」

と言つて、寿葉に切符を渡し、そそく
さと立ち去る。

寿葉「……」

気が付くと4番線の電車は通過し終わ
っている。

駅のアナウンス「まもなく、3番線に穂戸谷
行の電車がまいります」

寿葉、我に返り、手の中の切符を確認
する。

切符には「杉立発 920円」の文字。

寿葉、後ろを向いて電光掲示板を見上
げる。

「普通 08..06 穂戸谷」

3番線に電車が到着する。

寿葉、切符を握りしめて電車に走り込
む。

○穂戸谷行の電車、走る車内

車内アナウンス「まもなく終点、穂戸谷。穂

戸谷に止まります」

寿葉、ゆっくりと立ち上がる。

電車のドアが開き、一人降りる寿葉。

○穂戸谷駅のホーム

「穂戸谷」と書かれた看板。

ホームに人気はない。

改札へ降りるが駅員もいない。

寿葉、心配そうに切符を通す。

改札のドアが開く。

寿葉「ここで合ってた」

とほっとして呟く。

改札を抜けて階段を登ると、目の前に

は、ひたすらに続く一本道と田園風景。

田んぼに斜めに立つ案山子。

ビニールハウスにうっすらと積もる雪。

遠くを横切る白い野良猫。

木にかかる細かい氷柱には日があたり

水滴が垂れている。

息を飲む寿葉。

寿葉「きれい！」

寿葉、鞆からスマホを取り出す。
ロック画面に数件の着信履歴。
無視してカメラを開き、構える。
が、レンズの中の景色に首を傾げる。
寿葉、写真を撮るのをやめて、スマホ
の電源を切り、鞆にしまう。
そのまま大きく伸びをして、深呼吸を
する。
息は白く、空は晴れている。
一本道にパンプスで踏み出す寿葉。

○穂戸谷の田んぼ道

寿葉、田んぼを見ながら歩いていると、
道の先に無人の野菜直売所を見つける。
看板にはカラフルな文字で「とよだの
やさい」。
近づいて見る。
お金を入れる缶の後ろには、大根2本
と白菜3玉、トマトが1つ残っている。

トマトの値札が外れてなくなっている。

寿葉、徐に財布を取り出す。

少し迷ったあと、200円を缶に入れ、

トマトを手に取る。

× × ×

寿葉、歩きながらトマトをかじる。

寿葉「（思わず）あま。旬じゃないのに」

と独り言。

トマトを食べ切る。

ぐうとお腹が鳴る。

寿葉、お腹をおさえる。

しばらく歩くと、近くのビニールハウ

スから作業終わりの豊田祥子（45）

が出てくる。

寿葉「！」

寿葉、少しためらってから近づいて声

をかける。

寿葉「あの、すみません」

気づかない様子。

寿葉「（声を張って）あの！」

祥子、顔を上げて。

祥子「ん？ 私？」

寿葉、頷いて。

寿葉「すいません。この辺にご飯屋さんとか、
って、ありますかね？」

祥子、不思議そうに目を丸くして。

祥子「え、ないよ。この辺りには」

寿葉「そうですよね……。すいません、有難う
ございます」

寿葉、会釈をして進む。

祥子「ねえ」

呼び止められ、振り返る寿葉。

祥子「お腹減ったの？」

寿葉、無言で頷く。

祥子、大きく手招きをして。

祥子「おいで」

寿葉「？」

○祥子の家・玄関前

祥子、玄関の前で軍手を外し、ポケット

トから鍵を取り出す。

少し後ろに立つ寿葉。

寿葉「ほんとにいいんですか」

祥子「いいよいいよ、入って」

と言いながら玄関を開けて、中に入る

よう寿葉に促す祥子。

寿葉「…すみません。お邪魔します」

寿葉、会釈しながら中に入る。

祥子、リビングのドアを開け、

祥子「座ってて」

とダイニングテーブルの椅子を指さす。

寿葉「…すみません」

寿葉、イスに座る。

祥子「はいどうぞ」

祥子、寿葉の前にお茶を置く。

寿葉「（申し訳なさそうに）すみません」

祥子、台所に戻って。

祥子「すみませんって口癖？」

寿葉「！」

祥子、優しく笑って。

祥子「昼休憩取るところだったからちようどよかった。気にしないで」

寿葉「：有難うございます」

祥子、冷蔵庫から何かを取り出し調理している。

祥子「お名前は？ 今日はどこから？」

寿葉「小林寿葉といいます。東京から来ました」

祥子「寿葉ちゃんね。東京か。それはまた遠くから」

寿葉「はい。普通電車で、一本で」

祥子「各駅だと、ずいぶん時間かかるでしょう」

寿葉「そうですね。：あ、あの」

祥子「？」

寿葉「あの、お名前、お伺いしてもいいですか」

祥子、笑って。

祥子「ああ。私は、豊田祥子です」

寿葉「豊田さん。ありがとうございます。あ」

何かに気づいた様子の寿葉。

祥子「？」

寿葉「もしかして、直売所」

祥子、少し驚いて。

祥子「うん。近くでやってるよ」

寿葉、嬉しそうに笑う。

寿葉「さっき買って食べました。トマト。甘くておいしいなって思っていました」

祥子「あらほんとに？　ありがとう」

寿葉「トマトの値札がなかったので、200円入れてきたんですけど、足りてますか？　足りない分は払います」

祥子「え！　ほんと？　ごめんね。130円だからお釣り渡すよ」

寿葉「いえいえそんな、大丈夫です。足りてるならよかったです」

祥子「ううん、後で払うわ。値札も付け直しとく。ありがとう教えてくれて」

寿葉「いえそんな」

祥子、焼きおにぎりとカットトマトの

皿を持ってきて机に置き、寿葉の向かいに座る。

祥子「焼きおにぎりです。あ、トマトもよかつたら食べてね」

寿葉「有難うございます。（手を合わせて）いただきます」

祥子「どうぞ」

遠慮気味に焼きおにぎりを手に取る寿葉。

祥子、小声で「いただきます」と言い、焼きおにぎりを食べ始める。

寿葉、それを確認して、焼きおにぎりを一口食べ、そのまま続けてほおぼる。しばらくもぐもぐして飲み込んだあと、

寿葉「…とってもおいしいです」

としみじみとつぶやく。

祥子、笑って。

祥子「炊く前に味付けして、おにぎりにして、食べる前に焼くの。おいしいよね」

寿葉「へえ。味付け、炊く前なんですネ」

祥子「うん、おすすめ」

寿葉、焼きおにぎりを食べ終わる。

寿葉「：トマトもいただいていいですか」

祥子、笑顔で頷いてフォークを寿葉に渡す。

寿葉「すいません、いただきます」

寿葉、一つ食べて思わず。

寿葉「あま」

祥子「今日二回目だよね。うちのトマト」

寿葉「はい。やっぱり甘くておいしいです」

祥子「よかった」

祥子もトマトを一つ食べて。

祥子「ほんとだ。甘くておいしい」

寿葉と目を合わせて笑う。

寿葉「お腹空いて、路頭に迷うところでした。

ありがとうございます」

祥子「寿葉ちゃん朝ごはん食べてないでし

よ？」

寿葉「えっ。はい」

祥子「そうだと思った。ちゃんと食べな。朝

からおいしいもの食べると元気出るよ」

寿葉「…有難うございます」

祥子、話題を切り替えるようにスマホを取り出して。

祥子「見て。最近うちで採れたトマト。かわいくて写真撮っちゃった」

祥子、スマホの画面を寿葉に見せる。
真上から見るとハートのような形をしたトマトの写真。

寿葉「え、すごい。かわいい」

祥子「野菜育ててるとさあ、たまにこういうのが出来るんだよね。楽しいよ」

寿葉「食べるのがもったいないですね」

祥子、少し間を置いてからおどけて言う。
う。

祥子「ま、今食べてるんだけどね」

寿葉「え」

祥子、カットされたトマトを見て。

祥子「ちゃんとした形で見えないと、気づかないよね」

寿葉「…そうですね」

写真の画面が消え、ロック画面が映る。
カメラ目線で笑う幼い女の子。

寿葉「あ、画面」

祥子「消えちゃった？」

祥子、スマホを自分側に戻す。

寿葉「娘さんですか？」

祥子「！」

寿葉、すぐに付け足す。

寿葉「ロック画面の」

祥子、言葉の意味を理解して。

祥子「ああ。うん」

寿葉「豊田さんに似てますね」

祥子「やっぱり？ 夫はお父さん似だって言
ってたけど、私もたぶん私似だと思う」

祥子と寿葉、楽しそうに笑う。

寿葉「娘さん、お名前は？」

祥子「眞子」

寿葉「かわいいですね。お一人ですか？」

祥子「うん。そう」

なるほどと頷く寿葉。

祥子「寿葉ちゃんは？ 兄弟いる？」

寿葉「一人っ子です」

祥子「うちと一緒にか。愛情独り占めだね」

寿葉「（困ったように笑って）そうですね」

祥子「ご両親と仲いい？」

寿葉「はい。仲はいいです。でも最近全然会えてないです。就職してからはほとんど」

祥子「忙しいと中々ね。ご実家は？ 東京？」

寿葉「兵庫です。大学生になるときに上京して、そのまま東京で就職しました」

祥子「へえ、兵庫か。遠いね」

寿葉「そうですね」

祥子「東京からどのくらい？」

寿葉「新幹線で2時間ちょっとです」

祥子「2時間くらいで行けるんだ」

寿葉、ぽつりと。

寿葉「…思ったより近いですよね」

× × ×

寿葉「おいしかったです。ごちそうさまでし

た」

寿葉、立ち上がる。

祥子「それはよかった」

寿葉「本当にありがとうございます」

祥子もイスから立ちつつ。

祥子「今日、こっち泊まっていくな？」

寿葉「？」

祥子「東京帰る？」

寿葉「……考えてなかったです。なんか勢いで来ちゃって。これからのこと、なんにも考えてないです」

祥子「（寿葉の様子を伺いながら）もし、急がないならうち泊まっても行っていいよ。

寿葉ちゃんがよければ」

寿葉「え、いやそんな」

祥子「うちの主人も絶対気にしないし」

寿葉「でも、娘さん：眞子ちゃんも」

祥子「あー：眞子はね、ここにはいないの」

寿葉「？」

祥子「今は、ここにはいないの。さっき言お

うか迷ったんだけど」

寂しい目で話す祥子。

祥子「十年前にね。9歳のときにいなくなっ

たまま」

寿葉「…！」

寿葉、何といえばいいか分からず黙っている。

男性の声「ただいまー」

玄関の開く音。

寿葉「！」

祥子、玄関の方を指さして。

祥子「うちの主人。帰ってきた」

寿葉「…あ！ はい」

祥子「今の話ごめんね。気にしないでね」

寿葉「あ、いえそんな」

寿葉、慌てて立ち上がる。

祥子の夫、豊田修平（47）がリビングに入ってくる。

手にビラと直売所の缶を持っている。

修平「ただいま。ん？」

寿葉「あ！ すいません、お邪魔してます」

祥子、修平に寿葉を紹介する。

祥子「寿葉ちゃん。今日たまたま出会ってね」

寿葉「はい」

祥子「せっかくだからって一緒にお昼食べて
た」

修平「へえ、なるほど。…どうも」

寿葉、頭を下げる。

寿葉「勝手にお邪魔してしまつてすみません」

修平「いやとんでもない。お客さん来ること

なんて滅多にないから嬉しいよ」

修平、寿葉に笑いかけた後、祥子に向

かって缶を見せて。

修平「これついでに取ってきたから」

祥子「あくありがとう。そこ置いといて」

修平、缶を置く。

祥子、修平に近づいて。

祥子「どうだった？」

首を横に振る修平。

修平「いつも通り」

無言で頷く祥子。

何も言わずに二人の様子を見る寿葉。

祥子「あそうだ。私ちよつと作業の続きしてきていい？」

寿葉を向く二人。

寿葉、自分への問いかけだと気づいて。

寿葉「…えっあっはい。私はもちろん、大丈夫です」

祥子「急いでしてくる。おじさんというの気まずかったらいつでも外来て」

修平「おい」

寿葉、二人を見て笑う。

寿葉「いえ、気まずくないです」

祥子、修平の肩に手を置いて。

祥子「よかったね。じゃ、ちよつと行ってきます」

祥子が玄関から出ていく。

修平「ごめんね。気の使えない妻で」と言っつて、ソファーに座る修平。

修平の手からビラが一枚寿葉の近くに

落ちる。

ビラを拾う寿葉。

ビラの写真と文字が目に入る。

『探しています 行方不明から十年。』

豊田眞子（当時9歳）』

カメラ目線でピースをする眞子の写真。

修平「あ、ごめんね」

慌てて受け取る修平。

修平、言葉に迷いながら。

修平「娘のこと――」

寿葉「あ：その、十年前につて、さっき」

修平「ああ。うん」

寿葉、意を決して。

寿葉「：十年前に何があったんですか？」

修平、寿葉を見たあと、どこか遠くへ

視線を写す。

修平「僕と妻の帰りが遅れたんだ」

寿葉「……」

修平「クリスマスの時期でね。眞子が学校に行ってる間に、妻と二人で眞子のプレゼン

トを買いに出かけたんだよ。いいのが買えて帰ろうとしたら、人身事故で電車の遅延があつて、家に帰るのが少し遅れた。それで、真子の帰りのバスが家の近くに着く時間から6分遅れて家に帰った」

寿葉「6分……」

修平「その6分の中に、真子が何をしたのか、誰に会ったのか、どこに行ったのかは分からない。不安になって僕らを探しに行ったのかもしれないし、友達の家に行こうとしたのかもしれない。家の前で待ってる間に誰かに、連れていかれたのかもしれない」

寿葉「……」

修平「でもその6分の中に真子はいなくなつて、それからずっと帰ってこない」

修平、受け取ったビラを見ながら。

修平「今もこうやって探してるんだけどね」

寿葉「……」

忘れ物を取りに家に入る様子。

修平の声が聞こえ、リビングのドアの

前で立ち止まる。

修平、寿葉を見て、声の調子を明るく。

修平「だから、えっとことはちゃん？」

寿葉「はい」

修平「寿葉ちゃんと話せて妻も嬉しいと思うよ。眞子がいたら19歳だから。ほら、娘みたいで」

寿葉、首を横に振る。

寿葉「私、25です。眞子ちゃんより、だいぶ年上です」

修平「そのくらい変わんないよ」

修平、切なく笑って眩く。

修平「眞子も、寿葉ちゃんみたいに、どこか知らないところで、幸せに生きてくれたらしいんだけどね」

寿葉「！」

俯く寿葉。

修平、話題を変えるように。

修平「寿葉ちゃん、朝ごはん食べてる？」
寿葉「え」

修平「？」

寿葉「あ、食べてないです」

修平「最近の若い子は食べないことが多いって聞くからさ。朝ごはんはいいよ。朝からおいしいもの食べると力が沸くからね。ちやんと食べた方がいい」

寿葉、思わず少し笑う。

修平「ん？」

寿葉「すいません、なんでもありません。これからは絶対食べるようにします」

ドアの後ろでこっそり泣いていた祥子、涙を拭いて、リビングに入る。

祥子「ごめん軍手忘れた。寿葉ちゃん、おじさん大丈夫そう？」

修平「おい」

寿葉「（笑って）はい」

寿葉、荷物を持って。

寿葉「祥子さん。私、やっぱり帰ります」

少し寂しそうな祥子。

祥子「そっか」

寿葉、晴れ晴れとした表情で。

寿葉「これから何するか、決まったので」

祥子、笑顔になる。

祥子「うん。分かった」

寿葉、祥子と修平の方を見て、深々とお辞儀をする。

寿葉「本当にありがとうございました」

祥子「ううん。またいつでも来てね」

修平、優しく頷いている。

祥子「（何かを思い出したように）あ！」

寿葉「？」

祥子「トマトのおつり！ 70円！」

寿葉「…あ！ いえほんとにいいです。こんなにお世話になったので」

祥子「ううん、商売だから。ちゃんと受け取って」

と言いながら、先ほど修平がもってきた缶を開けて小銭を取る。

寿葉「いやほんとに…すみません」

祥子「思い出してよかった。そのままでも大

丈夫？」

寿葉「もちろんです。お財布あるので」

寿葉の正面に立つ祥子。

祥子「寿葉ちゃん」

寿葉「？」

祥子「親はね、子どもが幸せに生きてくれれば、いいのよ。それで」

寿葉「…！」

祥子「それで十分幸せ」

祥子、70円を渡して、そのまま寿葉の手を両手で包み込む。

祥子「おつりが来るぐらい、幸せ」

泣きそうな顔の寿葉。

優しく微笑む祥子。

○祥子の家・玄関（夕）

寿葉、パンプスを履く。

祥子、玄関のドアを開けながら。

祥子「寿葉ちゃんさ、どうして穂戸谷に来たの？」

寿葉、荷物を持って祥子の方を向く。

寿葉「ああ。理由があって穂戸谷にきたわけではなくて。ただ：」

寿葉の言葉を待つ祥子。

寿葉「：ただ、切符を拾って渡してくれた人がいて」

祥子「切符？ 寿葉ちゃんの？」

首を横に振る寿葉。

寿葉「駅のホームで、知らない人に、切符落としましたよって渡されて、思わず受け取っちゃったんです」

祥子「うん」

寿葉「それが終点までの切符で。落としたのは私じゃなかったんですけど、なんとなく受け取って乗ってきちゃいました」

祥子「なるほど。それでここに」

寿葉「はい」

寿葉、玄関のドアの外に出て。

寿葉「来てよかったです。ここに連れて、よかったです」

祥子「切符、渡してくれた人に感謝だね」

笑顔で頷く寿葉。

○穂戸谷駅のホーム（夕）

一人、帰りの電車を待つ寿葉。

ホームの椅子に座って、電話をかけている。

寿葉「あ、お母さん？ うん、ごめん。久しぶり」

遠くから電車の音が聞こえる。

寿葉「あのね、私ね。ちよつと疲れたからさ、仕事休んで、しばらくそっち帰ってもいい？」

○駅の前（朝）

駅の改札から出てくる松下りょう（18）。

蛍光イエローのダウンジャケットを着ている。

ポケットのスマホに通知が来る。

スマホを取り出し見ると、ロック画面に友達の坂野悠希（17）からのメッセージ。

「窓掃除おつ」と。

りよう、スマホの時間を見て。

りよう「あ」

慌ててかばんを肩にかけ、走り出す。

○高校の教室・内（朝）

担任の先生が数学の授業をしている。

りよう、教室の後ろのドアを開け、忍び足で入る。

りようを横目で見る悠希。

りよう、廊下側の一番前の席に座る。

先生、黒板の手を止め、りようを見て。

先生「おはようございます」

りよう「（間髪入れず）うす！」

先生、呆れた顔で授業を再開する。

りよう、ジャケットを背もたれにかけるついでに斜め後ろの悠希を見る。

悠希、ロパクで。

悠希「（ばーか）」

無言で親指を下に向けるりょう。

× × ×

授業後、りょうの前に仁王立ちする先生。
生。

先生「松下、覚えてるか？」

りょう「覚えてないです！」

悠希、楽しそうに二人を見ている。

先生、黒板の端に磁石で貼られた原稿用紙を読み上げる。

先生「もし、今後また僕が遅刻するようなこ

とがあれば、学校中の窓をピカピカにしま

りょう「（食い気味に）俺、命救ったつす」

先生、眉間にしわを寄せて、

先生「は？」

りょう「まじ、命救ってきました。それで遅刻しました」

クラス一同「……」

先生「…人助けは立派だな。で、お前は誰を

どう救ったんだ？」

りょう「ほつとくと線路に落ちそうだったんで安全なところに避難させました」

先生「？」

りょう「あ、ねこのストラップです」

少しの沈黙。

笑顔の先生。

先生「じゃ、これ」

先生、鞆から新聞を取り出しりょうの机の上に置く。

先生「今日の朝刊。やるから使えよ。足りなくなったら取りにこい」

りょう「：（諦めて）あざす」

先生「あと上着」

りょう「？」

先生、りょうの背もたれにある蛍光イエローのダウンジャケットを指さす。

先生「華美なものは禁止です」

りょう「俺の主観ではこれは華美じゃないっす」

先生「目がチカチカするものは華美です」

言葉の代わりに笑顔を返すりょう。

○同・内・休み時間

りょう、顔を両手で覆いながら。

りょう「まじで終わったわ〜」

悠希、単語帳を片手に淡々と。

悠希「おつかれ〜」

りょう、指のすき間から悠希を見て。

りょう「この学校って窓何個あんの？」

悠希「知らん」

りょう、教室の窓を数える。

りょう「この教室で12あって一学年6クラ

スだから…」

悠希「216」

りょう「計算はや」

悠希「クラス以外の教室と廊下もあるからな

い。普通にその倍はあるだろ。500とか

じゃない？」

りょう「うわあああ」

りよう、もう一度手の中に顔を埋める。
一通り喚いたあと、両手を離して顔を
上げる。

悠希の単語帳に気づいて。

りよう「お前受験なのに勉強してんの？
えら」

悠希、単語帳から目を離さずに答える。

悠希「たぶん次、小テスト」

りよう「あく。持ってきてないわ。なんか問
題出して」

悠希、テスト範囲をパラパラと見て。

悠希「信号機」

りよう「分からん」

悠希「トラフィックライト」

りよう「へえありがと」

悠希、絶対覚えてないだろ、と笑う。

りよう「えなに？」

悠希「いや別に（笑）。じゃあ次。クロスロ
ード。日本語は？」

りよう「クロスロード？ うわ分かりそう。

当ててえ」

悠希「まじそのまま。あと信号機と同じペー
ジ」

りよう「交差点」

悠希「！ そう。正解」

りよう「（嬉しそうに）ぴんときた」

悠希、単語帳の「crossroad」の欄を見
ながら。

悠希「十字路口・交差点。あと、人生の岐路と
か、分岐点って意味もあるって」

りよう「へえ。なんかかっこいいな。マンガ
のタイトルにありそう。覚えてたわ」

始業のチャイムが鳴る。

りよう「あ問題サンキュー」

と言って、晴れやかな顔で前を向くり
よう。

悠希「お前もう窓ふきのこと忘れてるだろ」
と呆れて笑う悠希。

○同・内・放課後（夕）

りよう、机の上に立って新聞で教室の窓を拭いている。

手が止まる。

りよう「あく疲れた〜」

悠希、散乱した使用済みの新聞紙を拾って、ゴミ袋に入れていく。

悠希「もうちよつとじゃん。この教室だけで許してもらえてよかったな」

りよう「さすがに全教室窓ふきさせたら問題なる。PTAが黙ってない」

悠希「お前が散々遅刻して勝手に掃除するって言い出したのにな？」

りよう「過酷な無賃金労働に自ら勤しんでしまうほど、遅刻した生徒を精神的に追い詰めた学校として訴えられる」

悠希、りようを見上げて。

悠希「言い換えってこええ」

× × ×

りよう、窓を拭きながら。

りよう「大学さ、知ってる奴いるんだっけ？」

悠希、りょうが立つ机の近くのイスに座って、使っていない新聞紙をパラパラとめくっている。

悠希「あ、俺？ いやほぼいない。遠征のときに1・2回試合で当たったことある奴がいるくらい」

りょう「へえ。まあ場所が遠いもんな」

悠希「そうだな。りょうは？」

りょう「え？」

悠希「働くところ、知り合いいの？」

りょう「ああ。俺まだ決めてないから」

悠希「料理屋で修行するって言ってなかった？」

りょう「修行したい料理屋はあるけど、雇ってもらえるかまだ決めてない」

悠希「あ。なるほどね」

りょう「うん」

りょう、隣の窓を拭くために、机を移動する。

使う紙面を変えて拭き始める。

りよう「来週面接。実技もある」

悠希「実技って料理の？」

りよう「そ」

悠希「へえ」

悠希、新聞を眺めたまま。

悠希「大丈夫だろ。文化祭のときのりようの

焼きそばうまかったし」

りよう「俺もそう思う。俺の料理まじうまい

よな。焼きそばはつくんないけど」

悠希「うん、うまいよ」

突っ込まれないことに驚くりよう。

照れ隠しをするように大きな声で。

りよう「まあ多分、そこで働くからさ、また

食べに来いよ」

悠希「おっけー。こっち戻るとき行くわ」

りよう「俺もお前のところ遊び行こうかな」

悠希、笑いながら。

悠希「いいけど、田舎すぎてなんもないよ」

りよう「あ、まじ？ 田舎なの？」

悠希「めっちゃくちゃ田舎」

りよう、それを聞いて思い出したように。

りよう「なんか前さ、小学生のころくらい。

二人で田舎行ったよな」

悠希、一瞬頭をひねったあとで。

悠希「…あ。行ったわ！ なつかし」

りよう「あれどこだったっけ？」

悠希、考えながら。

悠希「なんか確か、とりあえず終点まで乗っ

てみようって言って、電車で全然知らない

ところ行ったんじゃないか？」

楽しそうなりよう。

りよう「うわそうだわ！ そしたらとんでも

なく田舎辿り着いたんだ」

悠希「あれ楽しかったよな。ご飯屋もなんも

なかったけど」

りよう「駅名覚えてないけど、路線図見たら

分かりそう。終点だし」

悠希「な。行きたくなってきた」

りよう「卒業したあと行こうぜ」

悠希「うん、行こう」

りよう、わざとらしく伸びをして。

りよう「よっしゃあ。終わった〜」

悠希「おお。おつかれ」

悠希、ゴミ袋を広げてりようの使っ

いた新聞紙を受け取る。

りよう「まじ手疲れた」

悠希、立ち上がって校庭側の窓を見る。

悠希「すげー。めっちゃきれいじゃん」

りよう、机の上から全体を見渡して。

りよう「ほんとだ。綺麗になったわ」

悠希「……あごめん。俺言ったの夕日のこと

だった」

りよう「は？」

悠希、りようの素の反応に声を出して

笑う。

悠希「でもまあこんだけ綺麗に見えるのは、

窓が綺麗だからだと思う」

りよう、机から降りて。

りよう「そういうことな」

悠希、ゴミ袋を結んでもつ。

りよう、ジャケットを着る。

悠希「そのジャケット初めて見たわ」

りよう「一昨日買ったやつだから」

悠希、ジャケット姿のりようを見て。

悠希「華美だな」

○学校からの帰り道（夕）

歩きながら話す悠希とりよう。

りよう「あのさー、ドライブ行かね？」

悠希「え。今日？」

りよう「そう。バイクで」

悠希「免許取ったの？」

りよう「いや取ってない」

悠希「（悟ったように）俺？」

りよう、頷く。

悠希「（笑って）いいよ」

りよう「まじ？」

悠希「え、うん」

りよう「やった。夜バイク乗るの好きなんだ

よなー」

悠希「後部座席しか乗ったことない奴が言うのやめろ」

○悠希の家・外（夕）

悠希の家の前まで歩いて来る。

悠希「トイレ行ってくるわ」

りょう「うん」

悠希、家の中に入る。

外で待っているりょう。

悠希と入れ違いで悠希の母親、坂野良

子（42）が玄関から顔を出す。

良子「あらりょうくん。久しぶり」

りょう、振り返って。

りょう「あ、お久しぶりです！」

良子「なに、二人でドライブ？」

りょう「はい！」

良子「相変わらず仲いいねえ」

りょう「うす」

良子「りょうくんは卒業後もこっちだっけ？」

りよう「はい、実家っす」

良子「料理人目指すんだよね」

りよう「はい一応」

良子「そっか。頑張っつて。また今度料理食べさせてね」

りよう「あざす！ ぜひ」

悠希、「何話してんの」と言いながら戻ってくる。

良子「じゃあまた」

りよう、頭を下げる。

良子、二人に向かって、

良子「行ってらっしゃい。気をつけてね」

と言って玄関のドアを閉める。

悠希、バイクに近づきながら。

悠希「途中でガソリン入れるかも。俺ポケットないからりよう持ってて」

と言って裸の千円札をりように渡す。

りよう「おっけ」

りよう、悠希から千円札を受け取り、ジャケットの右ポケットに入れる。

○街なか（夜）

夜の町をバイクで駆け抜ける二人。

りよう「さみい〜」

悠希「さむいな〜」

道路沿いの木々はクリスマス仕様にラ

イトアップされている。

りよう、突然大きな声で。

りよう「俺さ、自慢するわ」

悠希「え？」

りよう「悠希がプロ入ったら。俺の友達プロ

サッカー選手だぞ、すごいだろって全知人

に言いふらすわ」

悠希「一番ダサイからやめろ」

りよう「いやでもまじで、自慢だわ」

悠希、内心喜びつつも平静を装って。

悠希「プロ行けるか分かんないけどね」

りよう「行けるよ。お前サッカーうまいもん」

悠希「説得力ないな」

交差点前で信号が赤になる。

悠希、バイクを止める。

少し沈黙したあと、淡々と話す悠希。

悠希「俺がプロなって試合で活躍したらさ」

りよう「？」

悠希「俺、友達とか親戚とか集めて凱旋パ―

ティーするから」

りよう「うん」

悠希「昔のクラスメイトとか、先生とかも、

みんな呼ぶから」

りよう「うん。いいんじゃない？」

悠希「それまでに自分の店もつといて」

りよう「：！」

りよう、ニカッと笑って。

りよう「おっけー」

信号が青に変わる。

悠希、アクセルを踏み、交差点を前進する。

突然、二人の乗るバイクに真横から車が突っ込んでくる。

吹き飛ばされるりよう。

頭を強く打ち、視界が暗くなる。

そのまま暗転。

○テレビ画面、ニュース番組（同日・夜）

アナウンサー「今日午後8時頃、俣江市杉立区
の交差点で乗用車がバイクに衝突する事故があり、
バイクを運転していた坂野悠希さん17歳が死亡しました」

『杉立区で衝突事故』『男子高校生一人死亡、他二人が重軽傷』のテロップと映像。

映し出される悠希の写真。

アナウンサーの声「また後ろに乗っていた18歳男性は意識不明の重体です」

○一年後・りょうの部屋・内（朝）

T『一年後』

鳥のさえずりが聞こえる。

時刻は7時36分。

閉まったままのカーテンのすき間から

太陽の光が漏れている。
部屋から出ていく足音。
勉強机の上に置かれたメモには「ごめんね」と一言。

○りようの家の物置・内

りよう、物置に入り何かを探している。
工具箱からロープを見つけ、取り出す。
持って出ようとして、ロープを落とす。
りよう、拾おうと屈む。
視界の端に蛍光イエローの何か。
思わず引っ張り出す。
事故の日に着ていたジャケット。
× × ×
フラッシュ、窓掃除を終えた後

悠希「華美だな」

真顔で言ってから、いたずらっぽく笑
う悠希。

× × ×
はっとするりよう。

○回想／高校の教室・内

りよう「なんか前さ、小学生のころくらい。

二人で田舎行ったよな」

悠希「あ。行ったわ！ なつかし」

りよう「あれどこだったっけ？」

悠希「なんか確か、とりあえず電車の終点まで乗ってみようって言って、全然知らないところ行ったんじゃないか？」

りよう「うわそうだよ。そしたらとんでもなく田舎辿り着いたんだ」

悠希「あれ楽しかったよな。ご飯屋もなんもなかったけど」

りよう「駅名覚えてないけど、路線図見たら分かりそう。終点だし」

悠希「な。行きたくなくなってきた」

りよう「卒業したあと行こうぜ」

悠希、りようを真っすぐに見て。

悠希「うん、行こう」

○戻って、りょうの家の物置・内

りょう「……っ」

りょう、ダウンジャケットを掴んで、

物置を飛び出す。

床に落ちたままのロープ。

○りょうの家の近くの道（朝）

りょう、家を出てどこかへ走る。

りょうの声「行ってみようと思った」

走りながら、ジャケットを着る。

着いた先は最寄りの駅。

券売機の前まで行き、財布を持ってい

ないことに気が付く。

咄嗟にポケットに手を入れる。

りょう「！」

右のポケットに千円札が入っている。

りょう「……借りるね」

ゆっくりと取り出す。

× × ×

改札を通り、駅のホームへ。

りようの声「最期に。終わらせる前に。行つてみようと思った」

○駅のホーム（朝）

切符片手に電車が来るのを待つりよう。顔を上げて周りを見渡すと、皆がスマホを触る中、ホームをふらふらと歩くスーツ姿の女性が目に入る。りようの声「なんとなく気になった」りよう、女性を目で追う。

駅のアナウンス「まもなく、4番線を電車が通過いたします」

ホームの先頭へ向かっていく女性の後ろ姿。

電車の音がだんだんと大きくなる。先に向かいながら、女性の体は少しずつ線路に近づいていく。

りようの声「もしかしたらと不安になった」周りの人々は女性に見向きもしない。居ても立ってもいられなくなり、女性

の後を追うりょう。

電車が近づいてきている。

一瞬、女性の足が止まる。

が、再び線路に向かって進み始める。

りょう、焦って走る。

ホームに迫る電車。

りょう「あの」

女性「！」

りょう、気が付くと女性の腕を掴んでいる。
いる。

二人の横を電車が通過する。

振り返る女性。

りょうより少し年上に見える。

りょう、慌てて手を離す。

りょう「あ、えっと……」

咄嗟に呼び止めてしまったので、何を
言えばいいか分からず、苦し紛れに。

りょう「あの：これ、落としてます」

さっき買った切符を見せる。

女性「え」

女性、驚いている。

りよう「これ、落としたんでどうぞ」

と言つて、女性に自分の切符を押し付け、逃げるように立ち去る。

× × ×

ホームの階段を下りて、改札を出ようとするりよう。

切符を持っていないので出られない。

駅員に事情を説明し、通してもらおう。

駅を出て、来た道を早歩きで戻る。

だんだんと歩く速度が遅くなり、止まる。

りよう、ポケットに手を入れ、切符の

お釣りを握りながら。

りよう「…なにやってんだろ」

と呟く。

× × ×

突然、小雨が降り出す。

りよう、空を見上げ、仕方なしに再び歩き始める。

そのとき、りょうの足元にサッカーボールが転がってくる。

女性の声「あ、すいません」

りょう「！」

ボールを拾って顔をあげると、目の前にいるのは悠希の母、良子。

良子「ありがとうございます」

良子、ボールを受け取ろうと近づいて。

良子「：りょうくん？」

固まるりょう。

良子、りょうの手からボールを取って。

良子「久しぶり！」

りょう「：お久しぶりです」

良子、傘にりょうを入れる。

りょう、ぎこちなく目をそらす。

良子「今ちょうどね、お墓参り行こうと思つて。あ、このボール、ずっと悠希と同じチームだった子が今プロ行って大活躍でね、わざわざ悠希にとってサインボールくれて。それを見せにね」

りよう「：そうなんですね」

良子、りようを見て明るく。

良子「ちよつと話さない？」

○カフェ・内（朝）

ドリンクバーから戻り、座る二人。

良子、オレンジジュースを一口飲んで。

良子「大山和義選手」

りよう「？」

良子「さっきの話。ボールくれた子。知らない？
りようくん、サッカー見ないんだっ
け？」

良子の隣に置かれたサッカーボール。
りよう、頷く。

良子「そっかー、じゃあ知らないか。まあ、
私も、悠希の試合しか見たことなかったけ
どね」

りよう「：」

良子「りようくんは？」

りよう「僕も、悠希の試合だけ見たことあり

ます」

良子「あ、ごめんそうだよね、聞き方間違えた。りょうくんは、最近どう？」

りょう「：！」

顔が強張るりょう。

良子「身体はもう大丈夫？」

りょう「：はい。大丈夫です」

良子、優しく笑う。

良子「そっか。退院してからどうしてるかあんまり話聞かなかったからさ、心配してたけど、よかった」

りょう「すいません」

良子、笑顔で首を横に振る。

良子「りょうくん料理人目指してたよね。今もそう？」

りょう「：：いや、今は」

良子「？」

りょう、絞り出すような小さな声で。

りょう「なんもしてません」

良子、頷く。

良子「そっか」

良子、オレンジジュースをもう一口飲む。
む。

俯いたままのりょう。

窓の外では相変わらず雨が降っている。

りょう、次第にぼつぼつと話し出す。

りょう「ドライブしようって言ったの俺なんです」

良子、黙って聞いている。

りょう「免許ももってないのに、俺が言ったんです。すいません」

良子「…」

りょう、震える声で続ける。

りょう「あのととき、ドライブ誘わなかったら。

悠希に運転頼まなかったらって、思います」

良子「そうだね」

下を向いたままのりょう。

りょう「…ごめんなさい」

良子「…確かに、あの事故のせいで、悠希の人生は奪われた」

りょう「すみません」

しばらくの沈黙。

雨の音が響く。

良子「でも、りょうくんの人生は奪われてな

いよ

りょう「！」

りょう、驚いて顔を上げる。

良子「変わったと思うけど、奪われてないよ。

奪われずに残された人はさ、多分そのまま、

続けていいんだよ」

驚いて何も言えないりょう。

良子「というか、続けてやってくれない？

気が進まなくてもさ、腰重くてもさ、しよ

うがないなああって文句言いながらも、続

けてやってよ」

りょう「でも」

良子、りょうを遮って。

良子「悠希のために」

りょうを見て力強く。

良子「自分のためじゃなくてもいいから。生

きてほしい」

表情を変えずに涙を流すりよう。

○穂戸谷・外（朝）

広く澄み切った青空。

祥子、直売所に野菜を並べている。

外れていたトマトの値札を新しく付け

直す。

寿葉の声「家に帰るのが少し遅れる」

× × ×

りよう、クローゼットを開ける。

少し迷ってから、蛍光イエローのダウ

ンジャケットを手に取る。

りようの声「親友をドライブに誘う」

× × ×

実家で朝ごはんを食べる寿葉。

食卓のカットトマトに一瞬手を止める。

寿葉の声「知らない人から、誰かの切符を受

けとる」

× × ×

ジャケットを着たりよう、どこかに向
かって外を歩いている。

りようの声「知らない人に、自分の切符を渡
す」

× × ×

寿葉、父母と楽しそうに話しながらト
マトを食べる。

寿葉の声「そんな小さな出来事が、自分の、

他人^{ひと}の人生を全部」

× × ×

りよう、花屋の前で立ち止まる。

りようの声「全部変える分岐点だと、そのと
きの僕らは気づけない」

× × ×

スマホを開いた様子、ロック画面の眞
子を寂しそうに見つめる。

そっと近づき、祥子の肩に手を添える
修平。

寿葉の声「気づけないから、奪われる」

× × ×

りょう、悠希のお墓に、一人手を合わせる。

お墓の前には花束と千円札。

× × ×

寿葉、飼い犬のリードをもって玄関のドアを開ける。

りょうの声「気づけないから、残される」

寿葉「（大きな声で）お母さん。まるの散歩、行ってきます！」

× × ×

お墓参りの帰り、駅の改札から出てくるりょう。

ポケットのスマホに通知が来る。

スマホを取り出し見ると一件のメール。

× × ×

フラッシュ、一年前の朝

悠希から「窓掃除おつ」とメッセージ。

× × ×

りょう、メールをタップして開く。

料理屋の採用を知らせる本文。

しゃがみこむりょうの背中。

○どこかの交差点

青空の下、犬を連れて歩く寿葉。

交差点の前で立ち止まる。

寿葉、左右と前を見て。

寿葉「どっち行こっか」

と犬に問いかける。

犬、寿葉に答えるように右に走り出す。

犬に引っ張られ、笑顔で走る寿葉。

× × ×

青空の下、交差点の前まで歩くりょう。

赤信号に立ち止まる。

スマホでマップを開く。

目的地を確認し、頷く。

信号が青に変わる。

りょう、横断歩道を渡り、交差点をま

っすぐ前に進んでいく。

タイトル『クロスロード』